

北海道スキー指導者協会の歩み

<シュプール 36 号掲載>

藤 島 勝 雄 編著

北海道スキー指導者協会が昭和 27 年、「北海道一般スキー指導員会」として発足して 57 年の長い年月が経ちました。その間、活動が停滞・停止した時期もありましたが、先人たちの努力により見事に蘇り現在まで続いております。

また、昭和 14 年 12 月「日本スキー指導者講習会」として山形県五色温泉で始まった指導員制度なくして本協会の歴史は語れません。

私どもはこの指導員制度の「周年行事」を意義深いものと考え、平成元年に 50 周年を小樽おこばち山荘、平成 11 年には 60 周年を滝川で盛大に祝ってきました。そして、来年は 70 周年行事を迎えます。

これらを生み出し、継続してきた先人たちの歩み、労苦を後輩に伝えるのが私どもの役割と考え「北海道スキー指導者協会の歩み」を作成することと致しました。

1、指導者講習会（指導員制度）始まる

S 14,12,21 ~ 23 山形県 五色温泉	第 1 回指導者講習会 検定委員長 高橋次郎 委 員(北海道関係) 山田勝巳 長田光男 稲葉忠七 杉村鳳次郎 藤沢伸光 (助手) 柴田信一 全国から 64 名受講 合格者 11 名 北海道関係合格者 末松久 曾田起一郎 高橋貞助(柴田信一)
	全日本スキー連盟は、S 13 年発行の「一般スキー術要項」をもとに、全国スキー講習会を開催した。(全国で 3,660 名参加。うち北海道は札幌、小樽、旭川、函館、野付牛、倶知安、岩見沢の 7 会場で 765 名参加)しかし、この「要項」に基づいて講習する人がいない。そこで、新たに「指導者講習会」を開催することとした。この講習会に助手として参加した柴田先生がその前後の模様を“指導員制度 50 周年記念講演”の中で次の様に語っています。 —第 1 回指導者講習会の前後— 柴田 信一 名誉会長(講演時) 第 1 回の養成講習会は検定会の名はついてなかった。私は技術員などの役員ではなかったので、本来そこに行くべき立場ではなかった。高橋次郎先生が「“一般スキー術要項”は出したが、教える事がマチマチで、教える形・スタイルは別々で困る。12 月に新しい指導者をつくるから手伝ってくれ」(中略) 10 人ほど合格証を受けましたが私は無かった。翌年の年鑑の端の方に合格番号 28 番と載った。昔から全日本は色々と不合理なものがあるんですね。
S 15 年度	北海道で初めて「指導者検定会」実施(小樽天狗山) 15 名合格 この時の“年度”は、学校年度と同じ 4 月 1 日から 3 月 31 日までをいう。
S 16 年度	札幌荒井山で「指導者検定会」実施 7 名合格
S 17 年度	小樽・樺太 2 会場で「指導者検定会」実施 2 会場計 18 名合格 これ以後、S 22,3 まで実施されず。
S 21 年度 22,3,21 ~ 23	小樽天狗山にて「一般スキー指導者検定講習会」再開 戦時中の有資格者の再確認を含めて 27 名が合格
S 23 年度 24,3,28 ~ 30	道連・道教委共催「一般スキー指導員研究会」 受講者を指導者章所有者に限定してニセコ五色温泉にて開催され、のちの指導

	員研修会のはしりとなった
S 24 年度	坂井敏夫会長、小樽・天狗山会場で指導員に合格 —坂井会長談— 27 歳の受検資格が出来て直ぐの受検だった。年一回の 3 日間検定で、単位制ではなかった。全道から 60 人の受検者があり、北見から受検した私は 17 人の合格者の中に入った。旭川の速水潔前会長と一緒に合格した。 理論テストは、「雪質とスイングの関係について述べよ」であった。私は“湿雪時はスイングを強く、粉雪時はスイングを弱く”を図表で示し、模範解答として検定員に取り上げられた。
S 25 年度	道連、S A J に先んじて「基礎スキー技術委員会」発足 委員長 柴田信一 委員 藤沢伸光 山本宇明男 栗林薫 伊藤二郎 南波初太郎 高橋貞助 内山拓治 松村俊三郎 佐藤哲郎 西島英雄 宮崎兼光 山崎久雄 坂井敏夫 清水清作 葛西儀四郎
S 26 年度	全日本スキー連盟は、「指導者」を「指導員」と変更する 全国の指導員数 208 名（北海道 69 東京 12 新潟 31 長野 22 東北 19）
S 27 年度	北海道スキー連盟は、「基礎スキー技術委員会」を「一般スキー技術委員会」と名称を変更する
2、北海道一般スキー指導員会発足する	
S 27 年 10 月 1 日	北海道一般スキー指導員会発足 会 長 高橋貞助 副会長 山本宇明男 顧 問 伊藤二郎 南波初太郎 幹 事 栗林薫 新妻正一 清水清作 村田吉雄 佐藤兼蔵 二瓶康典 野村治平 宮武勝見 上田嘉一 会 費 徴収せず S 25 年度「基礎スキー技術委員会」を発足させて、北海道スキー連盟サイドとしてスキー行政に対応しているが、技術委員会の限られた僅かなスタッフに対して、年々指導員の合格者が激増していくので、全指導員のつながりを何とか考えなければ、と内々話し合っていた。S 27 年になると、指導員の数も約 100 名近くになり、「北海道一般スキー指導員会」を組織することになった。これはあくまでも親睦団体であって、会員相互の和を深めることが目的であったが、当初は、いわゆる政・指未分化であった。北海道スキー連盟「一般スキー技術委員会」のスタッフがほとんど指導員会の役員を占めていた。（栗林薫先生） 一般的に柴田信一先生が初代会長とされているが（そういう記述もある）全日本スキー連盟及び北海道スキー連盟の基礎スキー技術委員会委員長に就いていて多忙だったため、高橋貞助先生が初代会長であった。
S 28 年度	会費 年間 100 円を徴収
S 30 年度	北海道の指導員総数 130 名
S 31 年度	・役員の交代 会 長 伊藤二郎 副会長 高橋貞助 西島英雄

	北海道スキー連盟の機構として S 25 年に「北海道基礎スキー技術委員会」が発足し、更に S 27 年度に「北海道一般スキー技術委員会」として一層充実を図ったので、政・指分離を考えて会長・副会長を交代した。スキー行政と親睦団体との混同を避けるための役員変更であった。
S 31 年度	全日本スキー連盟、「準指導員制度」導入する。 北海道では、32 年 2 月・3 月札幌・小樽・旭川の 3 会場で準指導員検定会が開催され、70 名の準指導員を生み出した。これによって、北海道の準・指導員の総数は 232 名となった。
S 34 年度 35, 3, 20 (朝里温泉)	昭和 35 年度代議員会 (17 支部) ・事業計画案 1、北海道冬山スキー指導者講習会 2、北海道一般スキー技術委員会の行事を実施 道技術委員会の <u>ヒンターランド</u> として実施する。(著者注：後背地帯) 3、機関紙の発行 ・予算案 (収入予定) 134,600 円 (会費 200 円 × 473 人 入会金 500 円 × 80 人) (支 出) 全日本一般委員会・全日本代表委員会・全道技術委員会への出席旅費補助として予算の 1 / 3 の 44,500 円を計上。 ・役員 会 長 伊藤二郎 副会長 高橋貞助 西島英雄 千葉毅 顧 問 柴田信一 山本宇明男 南波初太郎 葛西儀四郎 天近豊蔵 美濃秀 富田清 幹事長 宮崎兼光 幹 事 音喜多一二 西田照人 中村一郎 佐藤義炬 佐伯正 中島鉄雄 稲村礼 今村源吉 伊藤俊雄 後藤光一 監査員 新妻正一 小松重夫 事業、予算の使い方を見ると、全日本・道連の技術委員会との密着の度合いが如何に強いかがうかがわれる。

3、シュプール第 1 号発刊

S 35 年度 35,12,20	機関紙「シュプール創刊号」発行 (正文舎印刷所) —体裁— ・ A 5 版 右綴じ縦書き 86 ページ <u>シュプール</u> の字形は現在と同じ 表紙の色・薄水色 —掲載内容— < 指導員会関係 > ・代議員会報告 ・規約 ・役員名簿 ・研究発表等 (随筆、感想、スキー場紹介等) 20 名が執筆 ・広告 < 道連関係 > ・規約 ・役員名簿 ・一般スキー技術委員会報告 < 全日本関係 > ・全日本一般スキー委員会報告 ・検定規約改定 (準・指導員、バッジテスト)
---------------------	--

	—会報発刊について—会長 伊藤 二郎 最近スキーが盛んになるにつれて、一般スキー指導員の数も非常に増加し、北海道には現在指導員、準指導員約 500 名がいます。これら指導員の数が増加すると共に何かと連絡がとりにくくなり、会員相互の緊密さに欠けてきたので何か良い方法がないかと思っていたところ、会報発刊の運びとなり誠に喜ばしく、一日も早く手にとって見たいと思った次第です。 —編集後記—幹事長 宮崎 兼光 北海道の指導員会も会員 473 名を数える大所帯となつて、会としての組織立ても新しくなった。此の度、総務として仕事らしいものと考え、従来懸案の機関紙を発刊することを思ひ出した。これは幹事・音喜多氏の熱意からなる種々のお膳立てによることと、編集を引き受けて頂いた田中、中村、西田、野田頭諸氏の献身的努力によるものだ。 創刊号の掲載内容は、圧倒的に全日本・道連関係のものが多い。これは前述のように、「北海道一般スキー技術委員会」のほとんどの役員が指導員会の役員を兼ねていたためと思われる。また、研究発表は特に技術関係が多く「オーストリアスキー教程を読んで」「アンギュレーションについて」「スキー指導システムに於けるボーゲンの位置」等が掲載されている。
S 36 年度 36,9,16 (北翠寮)	昭和 36 年度代議員会 ・一般スキー海外派遣について 柴田信一氏を明年、イタリア・モンテボンドーネで開催される世界スキー指導者会議に送るべく、会員からの派遣費の調達を決定（会員 1 人 750 円） ・全日本スキー連盟に合わせて、「年度呼称」を会計年度（4 月 1 日～3 月 31 日）からシーズン年度（10 月 1 日～9 月 31 日）に規約の一部を改正 ・役員（前年度に同じ） ・事業計画案（前年度同様の記載事項） ・予算案（収入）会員数 549 名で、総額 150,800 円 （支出）機関紙発行に 50,000 円を計上
S 36 年度 37,1,1	シュプール第 2 号発行 —体裁— ・ A 5 版 横書き左綴じに変わる 114 ページ シュプールの字形は現在と同じ 表紙・赤（ちなみに 3 号は銀色、4 号は緑色、5・6 合併号は薄緑、7 号は空色） —掲載内容— ・指導員会・道連・全日本関係は、創刊号に同じ ・新たな掲載事項として、準・指導員理論検定問題集、指導員会会員名簿 —欧州派遣に際して—柴田 信一 一般スキー界の念願が実を結んで、全日本スキー連盟の一般部門から欧州派遣が決定しまして、私もその選に入れていただいたということは、実に一般スキー界の力強いバックアップの賜ものと思います。特に北海道の指導陣の方々の何があんでもという強い決意が、あの旭川研修会での坂井氏（現会長）の強い発言を生み、長い間山本氏を中心に道の技術員の方々の間でくすぶっておったものに火をつけたことになったわけで、私はここにあらためて道の技術員の方々と、それ等の考えを強くしかも全面的に支持して下さった指導員の皆さん方に、深い謝意を表さなければならぬと存じます。
S 36 年度	全日本スキー連盟指導員総数 1979 名 北海道は、549 名（指導員 220 名 準指導員 329 名）

4、会計年度からシーズン年度へ

S 38 年度 37,9,22 (郵政局)	昭和 38 年度代議員会 ・ SAJ に合わせて「年度呼称」変更のため昭和 37 年度はない ・ 役員改選 - 会 長 伊藤二郎 - 副会長 高橋貞助 西島英雄 千葉毅 - 顧 問 柴田信一 山本宇明男 葛西儀四郎 天近豊蔵 美濃秀 後藤光一 栗林薫 二瓶康典 宮崎兼光 - 幹事長 田中晋 - 監 査 音喜多一二 小松重夫								
S 38 年度 38,1,1	シュプール第 3 号発行 —座談会—「欧州のスキー事情」 ・ 前年、「スキー教育者会議」を含め 3 ヶ月間、ヨーロッパスキー視察してきた柴田先生を囲んでの座談会が開かれた。出席者は伊藤二郎全道指導員会会長、坂井敏夫全日本技術員（現会長）、田中晋全道指導員会幹事長他で、次の様な事柄が話し合われた。 <table border="1" data-bbox="368 887 1490 1055"> <tr> <td>・ スキー教育者会議の機構、組織、目的は</td><td>・ シューブとチェックは違う</td></tr> <tr> <td>・ シューブは空中、雪上、雪中に存在するか</td><td>・ ストックの位置はフリー</td></tr> <tr> <td>・ 滞空時分の長い抜重</td><td>・ オーストリースキーは変わったか</td></tr> <tr> <td>・ 乱暴な北海道の指導者</td><td>・ セフティオンリー</td></tr> </table> 等々、技術の話を中心に 13 ページもの紙面を割いている。	・ スキー教育者会議の機構、組織、目的は	・ シューブとチェックは違う	・ シューブは空中、雪上、雪中に存在するか	・ ストックの位置はフリー	・ 滞空時分の長い抜重	・ オーストリースキーは変わったか	・ 乱暴な北海道の指導者	・ セフティオンリー
・ スキー教育者会議の機構、組織、目的は	・ シューブとチェックは違う								
・ シューブは空中、雪上、雪中に存在するか	・ ストックの位置はフリー								
・ 滞空時分の長い抜重	・ オーストリースキーは変わったか								
・ 乱暴な北海道の指導者	・ セフティオンリー								
S 39 年度 38,12,21 日の出会館	昭和 39 年度代議員会 ・ SAJ の〈基礎教育本部〉への変更に合わせて「北海道基礎スキー指導員会」と名称を変更する ・ 役員（前年度に同じ） ・ 事業計画案（前年度同様の記載事項） ・ 予算案 （収入）会員数 741 名で、総額 225,342 円 （支出）機関紙発行に 112,000 円を計上 900 部								
S 39 年度 39,1,1	シュプール第 4 号発行 —特集—「オーストリア国立スキー学校特別講習会」 座談会 用語解説 オーストリアスキー教育用語例 ・ 38 年 3 月、クルッケンハウザー・オーストリア国立スキー学校教授率いる、国家検定教師 3 名（フランツ・フルトナー、バルトル・ノイマイヤー、ホルスト・シュバルツエンバッハー）による“オーストリア特研”がニセコで開催された模様を特集している。 —参加報告（実施内容）— - A , 斜滑降、横滑り、山廻りシュブング - B , プルーク、ボーゲン、シュテムボーゲン - C , シュテムシュブング - D , パラレルシュブング、（含むヴェーデルン） —参加者の感想— 佐藤 哲郎 パラレルで舞い下りる長身に、自分でも気分を出して続く。次はノーマルなヴェーデルン……。これにも大して苦しみはない(雲泥の差は自分には見えないので)。								

	その内に腰がぐっと低くなり、プロペラターンのヴェーデルンが必ず始まる。もう駄目だ。私の千鳥足を見て大声で笑う彼（フルトナー）の大きな口が待っているのだった。彼の部屋を訪ねたことが今でも胸にあたたかい。
S 41,8,15	シュプール第5号第6号合併号発行（原稿集まらず漸く合併号発行） —座談会—「スキーマーとともに」 ・小樽の指導員が野村スキー野村軍規社長を招いて、琴坂指導員の司会で次の様なことが話された。 ・スキーは短くなってきた ・スキーテクニックの面からみて ・グラススキーの問題点 ・新しいスキーの開発は ・スキー特性の見つめ方 ・グラスとメタル ・グラススキーは重いというが —代議員会開催の記載なし—
S 43,1,1	シュプール第7号発行 —座談会—「クルッケンハウザー教授特別研修に参加して」 ・今回の座談会の特徴は、同じテーマ「特研に参加して」で全道5支部（旭川・小樽・札幌・函館・空知）が其々集まって座談会を開いている点である。 —代議員会開催の記載なし—

5、指導員会活動の停滞・停止、そして復活

S 54 年度 54,1,27 ～2,4 山形・蔵王	・北海道基礎スキー指導員会が活動停止中の54年シーズン、アジアで初めて「インタースキー・蔵王大会」が開催され、日本は次のような実技発表をした。 ○（ナショナルデモン）ブルークから高度ターンへの展開 ○フィットフェルト式バインディングによる滑降から滑走への展開（北海道） ○少年アルペンのデモンストレーション ○少年ジャンパーの育成 ○ラングラウフのスキー ○ポールを利用した指導法 ○ハンディキャップスキー指導法 ○日本のスキー史 北海道の実技発表「フィットフェルト式バインディングによる滑降から滑走への展開」の出場に、当時、新進の技術員であった私（藤島）にも声が掛かったが、既にセフティバインディングの時代に北海道ではこれが日常的に使われている、の考えには納得しがたく出場を辞退したことが思い出される。
S 54,4 ニセコ	・北海道スキー連盟教育部理事会で北海道基礎スキー指導員会の再起設立が審議され、その世話役として中川伊佐美理事が選任される。
S 54,6,23 札幌クラブ	北海道基礎スキー指導員会再起設立準備委員会 ・指導員会設立のメリットは何か。現在指導員は教育部に所属し、不自由なことはない。指導員会が設立されることによって、かえって仕事が多くなるのではないか、等のことから検討委員会をつくり再度検討することとした。

S 54,8,4 札幌クラブ	北海道基礎スキー指導員会再起検討委員会 ・委員 柴田信一 栗林薫 坂井敏夫 伊藤博 中川伊佐美 毛利修三 山谷永蔵 戸叶恒次郎 大野末松 蓑島泰一 小林次男 中山不二夫 飯田誠一 大崎国文 大黒善太郎 佐々木健 川瀬譲治 斉藤優雄 坂井和夫 小松喧 ・再起についての意義づけ、目的、事業内容、会費等、種々検討を重ねた結果、北海道基礎スキー指導員会の設立に異議なしの結論に達した。
S 55 年度 54,10,13 札幌クラブ	「北海道基礎スキー指導員会」再起設立総会 ・出席者 栗林薫 坂井敏夫 毛利修三 戸叶恒次郎 伊藤博 蓑島泰一 橘俊雄 山谷永蔵 小松浩 中川伊佐美 中山不二夫 向琢也 市田晃一 小室浪一 幸田金弥 斉藤優雄 池田武 小林次男 小淵公司 渡辺恒男 北河茂 安戸巖 飯田誠一 嶋本一雄 土肥昭雄 山下和喜 ・規約審議 一部条文の変更等を幹事会に一任 ・役員選出 会 長 柴田信一 副会長 速水潔 栗林薫 坂井敏夫 小室浪一 佐藤哲郎 (常任的)幹事 中川伊佐美 東野靖信 飯田誠一 河野文雄 廣井弘 八木登 伊藤博 近藤晃
S 56 年度 56,2,10	シュプール8号(復刊1号)発行 —体裁— ・A 5 版 横書き左綴じ 90 ページ <u>シュプール</u>の字形は現在と同じ 表紙の色・緑(緑色が定着し 30 号まで続く) —掲載内容— <指導員会> 挨拶 座談会 経過報告 規約 会計報告 研究 全道各地区指導員会の歩み(小樽・日高・留萌) ・会員数 22 団体 1,951 名 ・予算総額 1,288,857 円(会費 500 円) <道連・S A J 関係> 記載なし —シュプールの再発刊にあたって— 会長 柴田 信一 指導員各位の結束の力と絶大な努力により、シュプールの再発刊が出来た。我々の仲間が、昭和 43 年の第 7 号まで、血のにじむ思いで追いつけてきたスキーの技術への執念を、北海道の今の若い世代に引き継ぐべき義務、それを我々の世代で終らせたならば、スキー文化の継承者である我々の誇りを自ら放棄するものであり、先人の努力に対する冒とくでもあるだろう。幸にして、それぞれ地区の指導員会のリーダーである諸先生の協力を得て、意思の統一をはかることが出来、今日の再発刊迄こぎつけ得たことは、私が組織に関係して以来 47 年間、これ以上の喜びはない。 —座談会—「北海道一般スキー指導会がなぜ活動を停止したか」 ・この座談会は、昭和 55 年 3 月 3 日、ニセコアルペン山荘に於いて、北海道基礎スキー指導員会が活動を停止した約 10 年間の北海道のスキーの歴史を記録するために機関紙「シュプール」に掲載する目的で開催されたものです。

- ・ 出席者
柴田信一 栗林薫 佐藤哲郎 戸叶恒次郎 橘俊雄 （司会）中川伊佐美
- ・ 教育部が大きくなり指導員がまとまって権威が生じてくると、指導員会は外郭団体のようなものになり余計なものになった。
- ・ 指導員の数が急激に増えてきた
- ・ 会費の納入が教育部と二重に納めことになり、会費が集まらなかった
- ・ 指導員会は必要なのかどうか。
- ・ 教育部と指導員会の性格の違いは何か

再起総会から１年半近く経っての復刊１号の発行で、あとがきに「本来であれば昨年(55年)８月に発刊できる予定であったこの復刊１号が、いろいろな事情から大幅に遅れたことを深くお詫びします」とあり、組織活動再会の大変さ、シュプール発行の難しさを物語っています。

また、休止前と再開後の掲載内容に明らかに差が出てきています。それは、道連・SAJ 関係の記事が全くなかった点で、創立当初から政・指分離とは言いながら出来ずにいた連盟教育部と指導員会とが明確に分離したことを表しています。

座談会の内容は今日的な問題で、今現在も私どもの協会が同様の問題を抱え前向きに議論しているところです。（以下、次回に続きます）

< 参考資料 >

- ・ シュプール第１号～第８号
- ・ スキー教程 66（S40,10,5 発行）
- ・ SAJスキー教程（S44,10,1 発行）
- ・ 全日本スキー連盟年鑑発刊 50 周年記念号（S52,12,14 発行）
- ・ 北海道スキー連盟創立 50 周年記念誌（S57,10,24 発行）
- ・ 栗林薫編著「北海道一般スキー八十年の歩み」（H3,8,1 発行）
- ・ 柴田信一先生遺稿集（H8,1,15 発行）

< 編集後記 >

資料集めから始まった「歩み」の編集は、昭和 35 年のシュプール創刊以前と、活動停止期間の資料の少なさに戸惑い、記憶が定かでない諸先輩の話を聞き歩きながら、何とか第 1 回目をまとめました。間もなく創立 60 周年を迎えようとする本協会の「歴史」が今まで作成されなかったのは、この資料集めの困難さが原因だったのではとも思われます。

もし、当時の資料或いはエピソード等ご存知の方がいらっしゃいましたら、道協会事務局までご連絡頂けましたら幸いです。次回で補完し、より確実なものにしたいと考えています。（藤島）